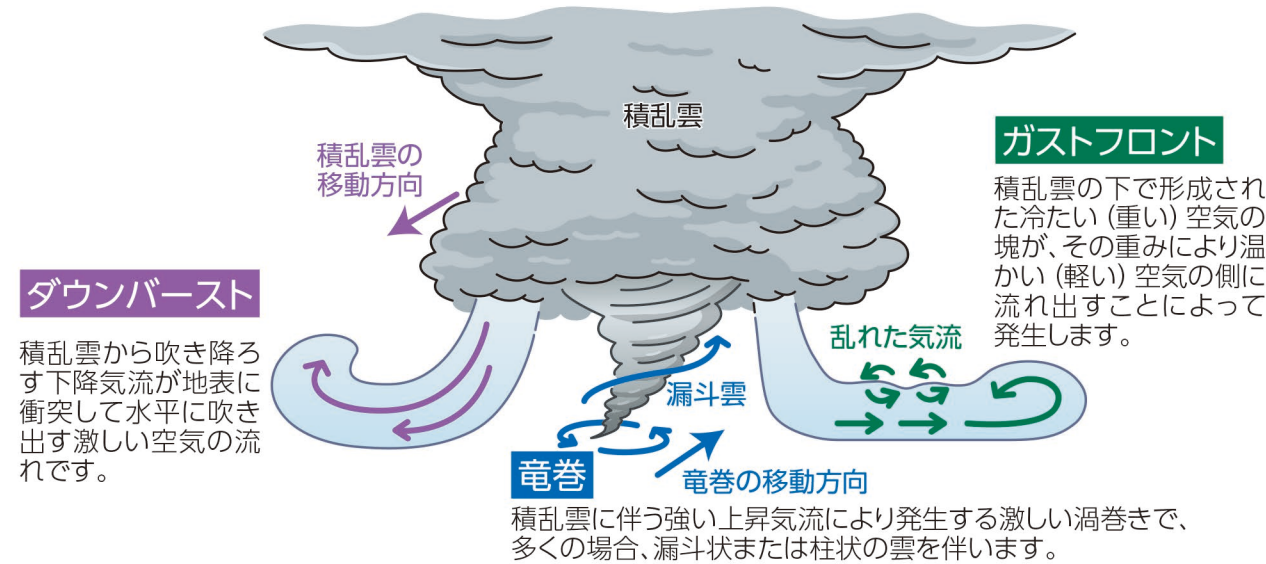


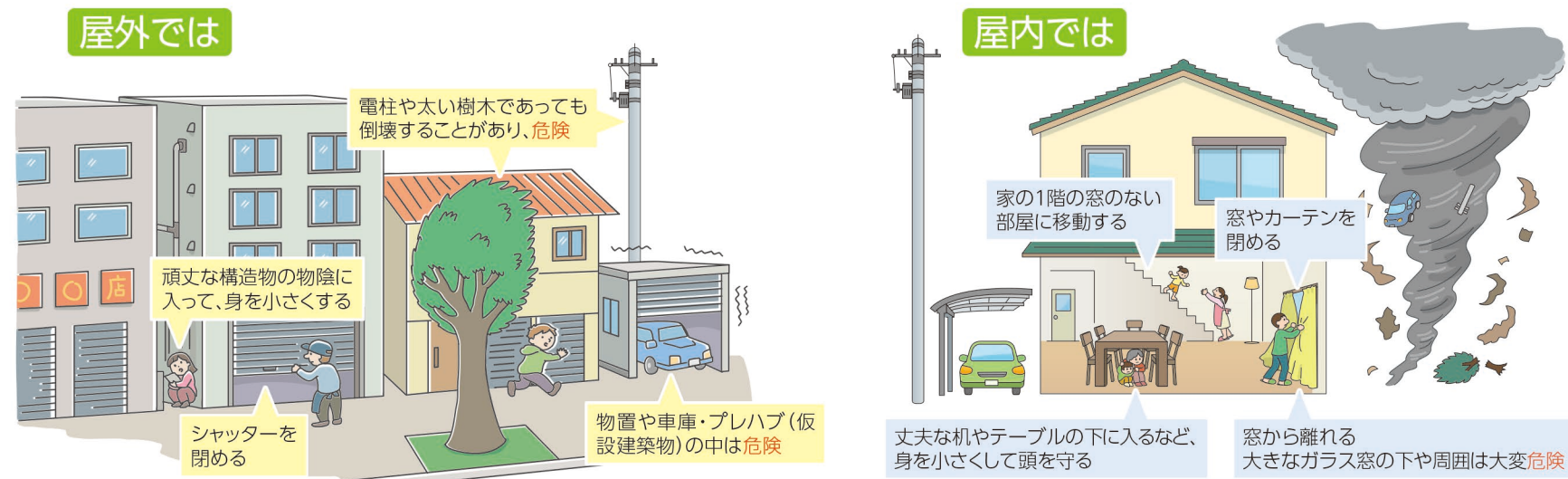
竜巻・雷対策

突風の種類

発達した積乱雲からは、竜巻、ダウンバースト、ガストフロントといった、激しい突風をもたらす現象が発生します。



竜巻から身を守る行動



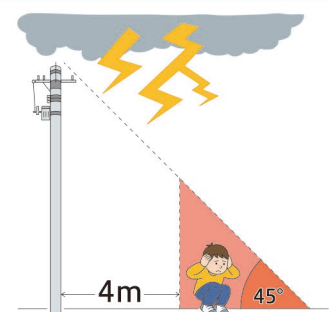
雷から身を守るには・・・

雷は、雷雲の位置次第で、海面、平野、山岳などところを選ばずに落ちます。近くに高いものがあると、これを通して落ちる傾向があります。グラウンドや平地が広がる公園、ゴルフ場、屋外プール、堤防や砂浜、海上などの開けた場所や、山頂や尾根などの高いところなどでは、人に落雷しやすくなるので、できるだけ早く安全な空間に避難してください。鉄筋コンクリートの建物、自動車(オープンカーは不可)、バス、列車の内部は比較的安全な空間です。また、木造建物の内部も基本的に安全ですが、すべての電気器具、天井・壁から1m以上離れれば更に安全です。



安全な空間に避難できない場合は・・・

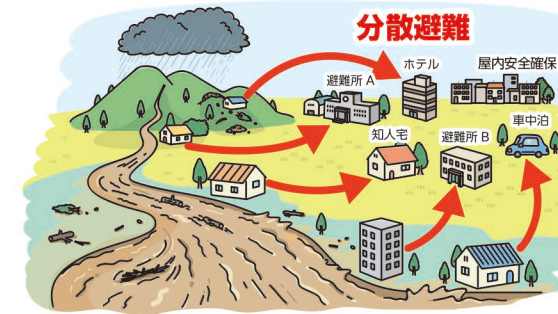
近くに安全な空間がない場合は、電柱、煙突、鉄塔、建築物などの高い物体のてっぺんを45度以上の角度で見上げる範囲で、その物体から4m以上離れたところ(保護範囲)に退避します。高い木の近くは危険ですから、最低でも木のすべての幹、枝、葉から2m以上は離れてください。姿勢を低くして、持ち物は体より高く突き出さないようにします。雷の活動が止み、20分以上経過してから安全な空間へ移動します。



雷の音が聞こえたらすでに危険な状態です!安全な建物へ避難しましょう。

避難の種類

災害の危険が差し迫っている場合は、安全な場所へ早めに避難することが重要です。ただ、避難所に多くの人が密集すると感染症などの拡大リスクが高まるため、あらかじめ避難所以外の避難先を考える「分散避難」の想定が重要です。



※避難経路が安全かを確認

※豪雨時の屋外の移動は車も含め危険です。やむをえず車中泊する場合は、浸水しないよう周囲の状況等を十分に確認して下さい

立退き避難

災害リスクのある区域等の居住者等が、自宅・施設等においては命が脅かされるおそれがあることからその場を離れ、対象とする災害から安全な場所に移動することが「立退き避難」であり、「立退き避難」が避難行動の基本です。

避難所

自宅の被害が想定され生活できない場合、自宅の周囲に不安がある場合などは避難所へ避難しましょう。食料や感染症対策に関する物品を必ず持参しましょう。

親戚・知人宅

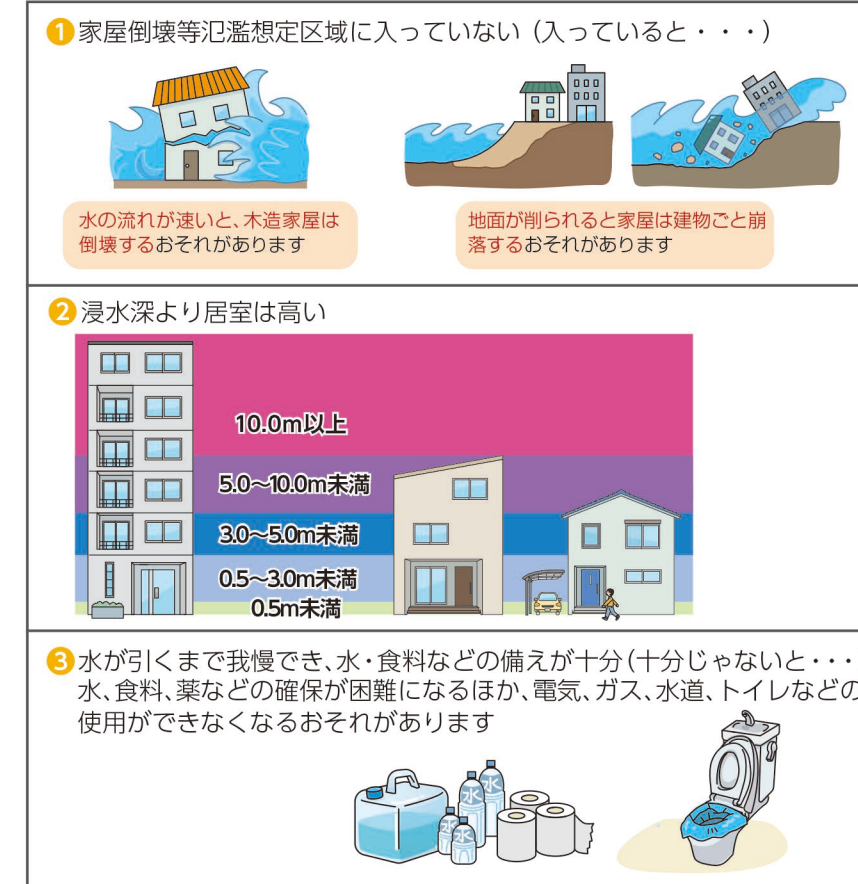
災害の危険性がない、安全な地域にある親戚や知人宅へ避難しましょう。日ごろから連絡をとって確認しておきましょう。

ホテル・旅館

災害の危険性がない、安全な地域にあるホテルや旅館へ避難しましょう。通常の宿泊料が必要なので、事前に予約・確認しましょう。

屋内安全確保(垂直避難)

災害から身の安全を確保するためには災害リスクのある区域等からの「立退き避難」が最も望ましいですが、洪水等および高潮については、住宅構造の高層化や浸水想定(浸水深、浸水継続時間等)が明らかになってきていることから、災害リスクのある区域等に存する自宅・施設等においても上階への移動や高層階にとどまること等により、計画的に身の安全を確保することが可能な場合があります。この行動が「屋内安全確保」であり、居住者等がハザードマップ等を確認し自らの判断でとる行動です。



※浸水の深さや建物の高さによっては、2階以上に避難
※山や崖から離れた部屋へ垂直方向に避難
※自宅で安全が確保できることがわかっている場合でも、より安全な上層階へ

緊急安全確保

「緊急安全確保」とは災害の危険が迫っているにもかかわらず、「立退き避難」が間に合わなかった場合に、命を守るためにとる“最後の手段”の行動です。洪水や土砂災害等がすでに発生している、または今すぐ発生してもおかしくないほど切迫した状況のとき、指定の避難所へ移動することがかえって危険になることがあります。そのような場合に、今いる場所よりも相対的に安全な場所へ直ちに移動することが「緊急安全確保」です。ただし、この行動はあくまで「次善の策」であり、行ったからといって必ずしも安全が確保されるわけではありません。安全な場所へ早めに「立退き避難」することが重要です。

緊急安全確保の行動例

